

# KSKR パンジーだより



一九九六年五月一日 第三種郵便物認可 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行

## 「つながりのある暮らし」を、もう一度



知的障害があるからといって、誰もがひとくくりにされ、同じくらしをする必要はありません。一人ひとりが「これが自分らしい」と思える生活を、私たちは一緒に作ってきました。

けれど、コロナ禍を経てふと振り返ると、個々のくらしがどこかこじんまりとしてきたように感じています。法人全体では活発な活動が続いている一方で、くらしの中の自然な「つながり」は、少しずつ薄れていたのかもしれない。

そんな今だからこそ、もう一度あらためて、「つながりのある暮らし」の可能性を見直したいと思っています。

来年、私たちは新たに3階建てのシェアハウスを開設する予定です。

1階には地域の方と交わる交流スペースを、2階からはくらしの場となるシェアハウスを予定しています。くらしの中に、さりげなく人との関わりがある。その空気感を、大切にしたいからです。

これまでも、私たちはグループホームの制度を活用し、さまざまな方の生活を支えてきました。最近では、重度訪問介護を利用したくらしの支援にも取り組んでいます。そして今、制度に頼らず、「その人らしさ」を軸にしたくらしづくりに取り組もうと考えています。

その第一歩として、私たちは10人で、ユニークな実践をしている場所を見学に行くことにしました。数人では共有しきれなかった気づきや感動も、10人いればきつと、それぞれの視点から持ち帰ることができるようです。

そしてそのワクワクが、パンジー全体に波のように広がっていくと信じています。

だれか一緒にワクワクしてくれる人、募集中です！

(林 淑美)

## 大空へはばたこう 岸和田上映会&シンポジウム

# 地域で生きる、その一歩を共に

2025年2月16日、岸和田市の浪切ホールで、映画『大空へはばたこう～自立への挑戦～』の上映会とシンポジウムが開催されました。主催は岸和田の自立生活センター「いこらー」、泉大津市の「リアライズ」、そして私たち。当日は地元の方々を中心に約150名が来場し、会場は静かな熱気に包まれました。

この上映会の背景には、私たちの胸を突き動かす事件がありました。2024年、岸和田市の入所施設で、知的障害のある方が職員からの暴力によって命を落とすという、あってはならない出来事が起きたのです。私たちはピープルファーストの仲間とともに抗議行動を行い、大阪府庁で会見も実施しました。その中で、亡くなった方には入所施設しか選択肢がなかったのか、自立という道を歩む機会がなかったのか、問い続けてきました。

映画を通じて何を伝えたいのか——何度も議論を重ねました。重度の知的障害がある方の多くが、保護者の高齢化とともに入所施設へ送られている現状。これは同じ大阪府内でも、都市部と地方では支援の厚みに差があり、「選べない現実」がまだ存在することを示しています。

上映会に向けては、大阪手をつなぐ育成会にも協力を依頼し、ピープルファーストの山田浩さんと共に本部を訪問しました。快く宣伝活動を引き受けてくださり、その日のうちに300以上の関係機関へ連絡していただけたことは、大きな励みとなりました。



シンポジウムでは、兵庫県立大学の竹端寛先生がファシリテーターを務めてくださいました。「地域で生きる」とはどういうことか——登壇した人たちは自身の体験や思いを丁寧に言葉にし、会場に衝撃を与えました。

「入所施設しかなかったのは、車いす障害者だって同じ」「施設で生きるということは、“いい子”を演じ続けなければならないということ」——そのような言葉が、会場に深く染み渡りました。そして、竹端先生より「パンジーのように、できない理由ではなく、できる理由を積み重ねてきた現場がある」と語られたとき、希望の光が見えた気がしました。

一方で、「入所施設に助けられている」と感じる保護者の声もありました。竹端先生は「入所施設以外でも、保護者が心から休める場所を作ることができれば」と話され、対立ではなく“歩み寄り”の空気が会場を包みました。

この上映会は、単なる映画鑑賞の場ではなく、「どうすれば重度の障害がある人も地域で暮らせるのか」という問いを、私たち一人ひとりが自分ごととして考えるきっかけとなりました。今後もこのような機会を重ね、地域に根ざした支援のあり方を模索していきたいと思えます。

一歩ずつでも、「自立への挑戦」を続けていけば、誰もが大空へはばたける日が来ると、私たちは信じています。

(池辺 昌史)

## パンジーダンサーの皆さんから学ぶ日々

振付家・ダンスファシリテーターくはのゆきこ(桑野由起子)

パンジーの皆さんとの初対面は去年の 11 月。

この圧倒的なパワーを持った方々とのダンスの時間は、自分が「記号カラダンス」という、いつでも、どこでも、誰でもすぐに踊れるダンスをやると決心した当初を思い出させてくれる、衝撃的な出会いとなりました。

私は幼少期から障害を持つ子も、みんな一緒に遊びながら育ってきました。鬼ごっこの時に足が悪くてうまく走れない子がいても、仲間に入れるようなルールを作る。自分より考えるスピードが遅い子と話していても、返事が帰ってくるまで待つ。そんなことは当たり前だと思っていました。

その当たり前がそうでないことを知ったのは、進学をきっかけに地元を出てから。

街中では障害ある方のことを見て見ぬ振りをする空気があり、そういう人が近づいてくると、あからさまに距離を置く人たちがいる。

それを目の当たりにしてからは、ずっと違和感の日々を過ごすことに。

いつからか「それは障害を持つ人たちの事を知らないからだ」という考えに至り、ダンスをきっかけに障害ある方々を世の中に発信していく活動をスタートしました。

記号カラダンスは、ただただがむしゃらに、大笑いしながらみんなで一緒に身体を動かすだけ。そこに間違いは存在しません。それぞれから出てくる表現は、全てが正解なんです。

内なるものを外に発信する行為はとても尊く、その人の無垢な姿がそのまま表れます。

障害があろうとなかろうと関係なく誰もが持つ才能であり、観る人の心を揺さぶる強い力があると信じています。また、互いに共鳴できる素晴らしいコミュニケーションツールとも言えます。

だからこそ、共に踊ることで障害について知識のない世界にいる人たちの心にダイレクトに響き、興味を持つきっかけになるのではと思ったのです。

パンジーの皆さんは、ダンスの時間をめいっぱい楽しむ心の余裕がある方々ばかりです。

我が我がで自分勝手に前に出てくる人はいません。むしろ、周りを気遣いながらみんながみんなを大切に想い踊ります。その気持ちは身体の動きから見て取れます。更にその身体達が繋がって、一体感のある温かな空間を作り上げているのです。

皆がありのままの自分で参加している。やりたくない時にはやらない。それでいい。

言葉は必要ない、今ここにいる事をみんなが肯定してくれている。それが出来るパンジーダンサーの人間力の素晴らしさ。圧倒的な存在感と優しさ。

それを毎回受け取ることが出来る自分はなんと幸せ者なんだと感じながら、また次のワークショップを心待ちにするのです。

パンジーの皆さんとの身体の会話は始まったばかり。これからどう転がっていくのかとても楽しみです。



## 「地域で生きる！」厚労省に届けた当事者の声

2025 年 2 月 25 日、全国からピープルファーストのメンバーと支援者約 30 名が東京に集まりました。「障害のある人が地域で自分らしくくらする社会を実現してほしい」と厚生労働省・障害福祉課の職員たちに直接訴えました。



最初に天畠大輔参議院議員が語った言葉は参加者の心に強く響きました。「入所施設での生活の何が問題なのか、省庁の人は本当に分かっていますか？ 私は入所施設でくらす経験があります。今でも時折、施設での悪夢を見ることがあります。自分では何も選べない生活が 365 日延々と続くのです」。この言葉で参加者の間に「同じ経験をしてきた」「思いを届けたい」という一体感が生まれたように感じました。

### 厚労省の対応と当事者の声

この日のやり取りの詳細は「きぼうのつばさ」第 104 回(4 月放送)、105 回(5 月放送予定)でも紹介されます。多くの当事者が「入所施設をなくしてほしい」と真摯な訴えをする中で、厚労省側の返答は次のようなものでした。「医療的ケアが必要な方や、強度行動障害のある方には、入所施設が必要だという声がある」「親の不安にも応えるのが厚労省の役割である」。

この返答に対して、ピープルファーストジャパン副会長の中山千秋さんをはじめ、当事者が一斉に声を上げました。「親の声ばかりを聞くのではなく、当事者の気持ちをもっと理解してほしい」。

### パンジーから参加したメンバーの感想

山田浩:「なんで親の思いを考えるのかな。地域の受け皿を作ればいいだけなのに。それをしない言い訳をしている気がした」。浅野真岳:「厚労省の人は何もわかってない。親の話をして。当事者の意見を大切にしていない」。翌日のピープルファースト会議では「グループホームで自立してくらせば、親も安心できる」という意見がでました。

### 「地域でくらすこと」の実現に必要な視点

地域で安心してくらする制度や人材が整っていないから、仕方なく入所施設が必要だと言っている場合が多いと思います。にもかかわらず「施設が必要という声がある」という理由で施設を存続させるのは本末転倒です。強度行動障害のある人に対しても、必ずしも特別な施設が必要とは限りません。地域から隔離された場所で訓練したとしても、どうやって地域に戻って生活するのでしょうか。施設以外では生活できないことが立証されるだけではないでしょうか。それよりは地域で生活する為の制度と支援方法の共有、運営維持ができる報酬を整えていけば、地域でくらすしていけるはずですよ。

### 信じることから始まる社会の変化

最も重要なのは、厚労省が「入所施設がなくても人は地域で暮らしていける」ということを本気で信じることだと思います。その信念があってこそ、制度も、方向性も、変わっていくはずですよ。

この日、私はとても貴重な体験をしました。当事者が一体となったときのエネルギーを感じて、声をあげること、伝えることの大切さを改めて感じました。そして何より、「変えられる」と信じることを、胸に刻みました。

(森田 茜)

## 希望の光を信じて



強度行動障害のある千頭雄介さんが、入所施設を出てパンジーに通い始めたのは今から一年半前のことです。千頭さんに寄り添い続けてきた私は、この間の取り組みについて、共同通信社の記者からインタビューを受けました。その記事がインターネットニュースで公開されると、間もなくパンジーに1本の電話がありました。

「あの千頭さんが、地域で一人ぐらし？」

驚きの声をあげたのは、かつて千頭さんが入院していた精神科病棟の医師でした。以前の千頭さんを知る病院関係者の方は、将来的に見ても地域で生活ができる可能性は正直難しいと考えていたそうです。

しかし今回、千頭さんの地域移行が実現したことで、その医師は「希望の光を感じた」と言います。そして現在、入院している対応が難しい患者のために、何かアドバイスだけでもいただけないかと相談を受けました。

正直、私に何ができるのだろうか戸惑いながらも、一度病院を訪問し、お話を伺うことにしました。患者さんは現在35歳の男性で、入院生活は10年に及びます。そのうち9年間は行動障害によって拘束をしなければならない状態が続いており、なんとかこの状況を打開したいという切実な願いがありました。

私は胸が締めつけられるような気持ちになりながら、彼が将来地域で生活できるよう願うとともに、私たちが何とか力になれたらと思いました。しかし、パンジーではこれまで精神科病院から直接地域への移行を受け入れた前例がなく、行政や入所施設などと連携しながら長期的に地域移行を支援してきました。一法人だけで対応するには難しい課題も多くあります。その為、今回の相談については専門家や相談機関にも協力を得ながら、長期的な視点で最適な支援方法を模索していく必要があると考えています。

また、今回の話とは別に、パンジーの情報発信をきっかけにもう1人、連絡をくださった方がいました。それは、滋賀県にある支援学校で不登校となり、自宅に引きこもっている18歳の当事者の親御さんでした。親御さんによると、滋賀県では行動援護点数が15点ある場合、定員50名の入所施設しか行き先がなく、グループホームは軽度の人しか受け入れない状況だそうです。この現実を聞き、改めて障害のある当事者が直面する社会状況の問題点を痛感しました。

それと同時に、情報発信を通じてこれだけ反響があったことにも驚きました。そして、それぞれに生きにくさを抱えて苦しんでいる人が、社会にはたくさんいることを実感しました。

滋賀の18歳の当事者は、3月にパンジーを見学した後、2回の体験実習を経て、4月から週に一度通所することになりました。私たちは彼の新たな門出を祝福し、寄り添いながら一緒に歩んでいきたいと思えます。

そして、どんなに障害が重くても、誰もがその人らしく生きて欲しいと願っています。(北田 徹)



## 各場だより

### 新たな挑戦へ



パンジーに三村さんがやって来たのは25年も前のことです。

当時、お菓子の小さな景品箱を、大きな手で器用に、そして信じられないほどの速さで組み立てていたその姿。「この人、すごいなあ」と思わず見とれてしまった記憶があります。軽作業の現場では、数え切れないほどの場面で力を発揮してきた三村さん。そんな彼が今年度から挑戦するのは、パン作りです。

「できた。パンを気にして触ってしまいかも」「おいしそうで、食べたくなってしまうんじゃないか」「そんな支援者の心配をよそに、初日の三村さんは、工房の中をゆっくりと歩いて様子を見ていました。こちらから「これお願いできますか?」と声をかけると、すぐに動いてくれました。その姿に、私たちはまたひとつ、新しい三村さんを見つけたように思いました。



(見館 史郎)

パンジーメディアの番組「私の歴史」に出演したときも、字を読めないと思っていた三村さんが、声に出して読んでいた姿に、私は驚きました。私の知らない「三村さん」に出会ったのです。

もしかしたら、パン屋でも、今まで知らなかった三村さんの一面が見られるかもしれない——そう思うと、今からとても楽しみです。

パン屋には、他にも新しい仲間が続々と加わってきています。これからどんなチームになっていくのか、どんなパンが生まれていくのか。みんなの「やってみたい」を信じながら、小麦ではなく米粉が材料のパンを、一緒に作っていききたいと思います。

### 大城さんの

### 言葉にゆれて



今年に入り、パンジーIIでは複数の方が体調を崩し、入退院を繰り返す状況が続いています。大城二三夫さんもその一人。グループホームあじさいで仲間たちと暮らしながら、パンジーIIに通っています。

年齢とともに持病の影響が広がり、熱や肺炎での入院が増えました。そのたびに退院し、また日常へ戻ってくる…その繰り返しです。ある時、大城さんが「病院の方がゆっくりできるから、入院したい」と言った言葉に、私は迷いました。しんどい時に安心してできる場所が病院なら、その選択もありかもしれない。でも、私たちが大切にしてきた「地域で、その人らしく生きる」支援とは何だったのか?とも思いました。

パンジーでは、訪問診療や訪問看護と連携しながら、できる限り住み慣れた場所でのくらしを支えてきました。しかし医療が必要な場面では病院の力も借りざるを得ません。「こ

のまま地域で見ていいのか?」「より安全な医療を優先すべきでは?」という問いが頭をよぎります。

それでもやっぱり、軸にしたいのは「本人の意思」です。

「家で暮らしたい」「仲間と過ごしたい」「しんどいときは病院で休みたい」——どれも大切な本音です。その声に耳を傾け、最善の支援を探し続けたい。「もし自分だったら?」と自問しながら、大城さんの日々に寄りそい、本人の想いを真ん中に据えて、これからも歩いていきます。

(西野貴善)



ちよつとずい、  
いつしょに  
3

私がパンジーⅢで働き始めて、今年の4月末で4年になります。これまではずっと厨房で勤務していましたが、この4月からは軽作業部門へ配属され、新しい環境での仕事が始まりました。最初は不安もありましたが、作業場で一緒に過ごす当事者の皆さんとの関わりの中での気づきや学びがありました。

特に印象に残っているのが、杉本健太郎さんとの関わりです。杉本さんは昨年4月、支援学校を卒業してパンジーⅢに通所し始めました。最初の頃は緊張した様子で、個室で過ごすことが多く、私たちは「一緒に作業しましょう」と声をかけていました。

そんなある日、作業中に部品が転がって杉本さんの個室の方まで行ってしまいました。「取ってもらえますか?」とお願いくると、彼は初めて個室から出てきて手伝ってくれたのです。それをきっかけに、少しずつ

つ作業場に顔を出すようになり、やがて一緒に作業するようになりました。その時は、周りの人たちと一緒に嬉しくなりました。

日々の関わりを重ねる中で、杉本さんは笑顔や会話が増えていきました。最近では、毎朝行う軽作業の準備を誰よりも早く始めてくれます。その姿はとても頼もしく、私自身も「自分も頑張ろう」と勇気をもらっています。

これからも、当事者の皆さんと共に支え合いながら、より良い支援を目指していきたいと思えます。

(山田 雄二)



小学生との  
素敵な出会い  
5

高松市にある香西小学校の5年生の皆さんが、「障害者施設の1日を知ろう」という学習テーマでパンジーⅤを訪ねてくれました。地域とのつながりを深める授業の一環で行われたもので、子どもたちは施設内を見学し、当事者との交流を通して理解を深めていきました。

当日は、長尾さん・芋坂さん・半山さんの3名が、小学生からのたくさん質問に答えてくれました。また、当事者が考えた「パンジーVクイズ」を出題。半山さんは自身のSNSを動画でわかりやすく紹介したり、みんなで楽しみながら学び、盛り上がりつつありました。

その後、開催した「パンジーVまつり」にも、小学生たちが来て、会



場の飾りつけを手伝ってくれたり、手作りのオブジェを展示してくれたり、素敵な彩りを加えてくれました。子どもたちの間に、つながりが生まれたように感じました。

さらに嬉しいことに、小学生たちがパンジーⅤで学んだことを発表する場に、当事者を招待してくれました。発表を熱心に聞く当事者の姿、自分たちの学びを一生懸命に伝えようとする小学生たち。

心が通い合う交流となりました。最後には、みんなで記念写真をパシャリ!

このように、学び合い・支え合う地域の関係が少しずつ広がっていくのは、素晴らしいことだと感じます。パンジーⅤは、これからも地域に根ざした活動を当事者と共に力を合わせて発信していきます!

(川股 友子)

**書き損じハガキ、(未使用) 切手を送ってください!**

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか? 当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします。

○書き損じはがき、切手をありがとうございました。 寺野享子様 柏田勝幸様

**パンジーでは、後援会員を募集しています。**

賛助会員 1口 1ヵ月 500円 本会員 1口 1ヵ月 1,000円

特別会員 1口 1ヵ月 3,000円 郵便振替番号 00950-1-300551 クリエイティブハウス「パンジー」



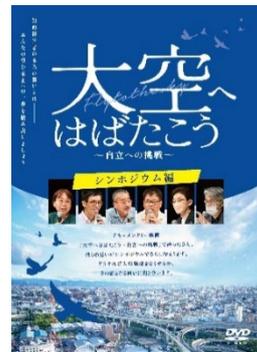
**上映会を開きませんか? DVD も好評発売中!**

知的障害がある人たちについて、もっと知ってもらうために、社会を変える力にしていけるためにパンジーマディアは、出張上映会や自主上映会を応援しています。

シンポジウムや人権の研修会、学校の授業、事業所の研修など、パンジーマディアの映画を通して、語り合いや交流の輪が生まれ、知的障害がある人たちへの理解が広がっていくことと思います。

費用・内容は、**パンジーマディア 072-968-7151** にお問い合わせください。

メールでもOKです! [pansymedia@pansy-net.or.jp](mailto:pansymedia@pansy-net.or.jp)



**『大空へはばたこう』 解説・資料版**

監修 パンジーマディア & 小川道幸

[定価] 1200円(税別)  
Kindle版 1000円



「大空へはばたこう」の映画、シンポジウムでは語りきれなかったことを資料として収めました。映画を見た人が、もっと知りたいと思った時、いつでも映画を振り返り、私たちの伝えたいことが分かってほしい。そんな思いから本書を作りました。今もお入所施設を利用せざるを得ない12万人の人たち。すべての知的障害者が地域の中で自分らしいくらしを実現するためにみなさんと一緒に行動を起こしたいと思います!

**編集人**

クリエイティブハウス「パンジー」

東大阪市東鴻池町 2-4-8

TEL:072-963-8818

FAX:072-963-8825

**発行人**

関西障害者定期刊行物協会

大阪市天王寺区真田山町 2-2

東興ビル4階

5月24日(土)

HAPPY

# パンジーまつり

I 会場



近畿郵政楽団

盾津中学校 吹奏楽部

ダンス出場者募集!

II・III会場

ふわふわ  
エア遊具で遊ぼう!



縄手北中学校 吹奏楽部

日新高校 軽音楽部

おいしいお店やキッチンカーも!



めだかすくい



社会福祉法人 創思苑



シャトルバス  
あります!

【協力団体】

- ★いちばん星 ★エール
- ★若草園 ★よりはうす
- ★メサヴェルデいしきり
- ★ゆうとおん ★和音堂
- ★ミネラルスイーツラボ・にちかっか

★ I 会場 東大阪市東鴻池町 2-4-8 TEL: 072-963-8818

★ II, III会場 東大阪市中新開 2-11-20 TEL: 072-960-3610